

幼児の環境認識を育む保育カリキュラムの構想
—自然に基づく伝統文化の伝承に焦点を当てて—

A Research of the Early Childhood Curriculum for Child's Environmental
Recognition : Focus on Traditional Culture Based on Natural Circulation

木村 学

KIMURA Manabu

文京学院大学

[要約]

本稿は、近代公教育制度の一端である幼児教育において、効率的・一斉的な行事保育が展開される傾向にあることを問い直すために、幼児の環境認識を育むための保育カリキュラムについて検討することを目的とする。そこで、カリキュラム構想の視点として、自然の循環に基づく伝統文化に注目する。なぜなら保育・教育の目的の一つは、私たち大人や先人の知恵やわざの文化を後世に伝承することであり、それらは各々の地域に伝統文化として継承されているからである。現代社会の私たちのライフスタイルが、自然と切り離された生活に変化したとしても、こうした伝統文化を通して、私たち人間と自然の繋がりを再認識することは重要な事である。そこでA幼稚園で実践されている既存の行事を対象に、元来の成り立ちやその意義を再確認し、カリキュラムを構想するための一つの試論を提示することを試みた。分析の結果、幼児教育は生活を通しての教育であり、その根底には自然の循環に基づく農作業の生活リズムがベースとなっていることに注目した。そして農作業の意義として3つの点を明らかにした。一つ目に、農作業のリズムは、あくまでも作物自らの成長する力と天候に左右される為、人間の力は成長のサポートでしかないという点である。二つ目に、家族総出の田植え作業に見られるように農作業においては、しばしば集団性と協働性が要求される点である。三つ目に、農作業の指標として最も大切な要素である「お天道様」をはじめ星や月への天体への意識を育む点である。

[キーワード] 幼児 環境認識 伝統文化

1. はじめに

本稿は、近代公教育制度の一端である幼児教育において、効率的・一斉的な行事保育が展開される傾向にあることを問い直すために、幼児の環境認識を育むための保育カリキュラムについて検討することを目的とする。そこで、カリキュラム構想の視点として、自然の循環に基づく伝統文化に注目する。

なぜなら保育・教育の目的の一つは、私たち大人や先人の知恵やわざの文化を後世に伝承することであり、それらは各々の地域に伝

統文化として継承されているからである。例えば、ごく一般的なもので言えば、子どもを対象とした桃の節句や端午の節句などを挙げることができる。そして、こうした行事は実際に多くの保育所・幼稚園で実施されていることである。しかしながら、行事本来の意味やねらいを明確にせぬままに実施されている場合も見受けられる。上述の五節句の例で言えば、五節句とは自然の循環に基づき農作業を続ける農繁期の中の休息日であり、ハレの日としての祝いの日ということになる。

現代社会の私たちのライフスタイルが、自然と切り離された生活に変化したとしても、こうした伝統文化を通して、私たち人間と自然の繋がりを再認識することは重要な事であろう。そもそも幼児教育は生活を通しての教育であり、その根底には自然の循環に基づく生活リズムがベースとなっているのである。このことを再確認することを通して、改めて幼児の環境認識を育む保育カリキュラムを構想できるのではないだろうか。

2. 生活文化の伝承と人間形成

幼児教育の基本は、生活を通しての教育であることはすでに述べた。そして幼児の生活とは、その多くが遊びに費やされるものであり、幼児教育においては遊びを通しての指導が求められることになる。幼児の遊びは、身の回りの環境への興味関心からはじまり、やがて周囲の大人の生活への興味関心から、大人の生活を模倣し自らの遊びとして再現していくのである。幼児期の女児の多くがママゴト遊びをするのはその証であろう。それゆえに、幼児の遊びは大人の生活スタイルを実に忠実に再現するのである。例えば、ママゴト遊びの展開は、食材の下ごしらえをして火にかけるというプロセスを簡略化して、調理済みの食材を電子レンジでチンするというように遊びの中で簡素に再現されるのである。

このように現代社会においては、科学技術の発展に伴い大人の生活文化はますます簡略化され、貧困になってしまったと言えるかもしれない。かつて地域や家庭生活の中で伝承されていた伝統文化も、もはや幼児の前で遊びとして実践されることは少ないのが現状だろう。佐野によれば、ハレの日は一年や一生の節目であり、時間も平板に流れるものではなく、凝縮された時を節目として、生活リズムを刻んだのだという¹⁾。しかし、現代社会においては、ハレの時間が日常化し、祝祭日も祭日から単なる休日へとその性格が変化し

たという。例えば、筆者は幼少期を北関東の田舎で過ごしたが、十五夜のお供え物を子どもが享受するという文化がわずかに残存していた。月夜の明かりを頼りに、徒党を組んでお供え物に手を伸ばすのは、スリル満点であり良き思い出として記憶している。七つ前は神のうちと言われるように、子どもにお供え物を分け与えることは縁起の良い事という地域の文化が成立していたのであり、大人の生活文化の中に子どもという存在がきちんと位置付けられていたのである。

すなわちここでは月夜が巡りくるような自然の循環と大人の生活文化と、子どもという存在が有機的に繋がっていたわけである。そうであれば、その当時子どもたちにとって月という天体の存在は、日常生活の重要な関心事であり、子どもたちの生活と関連付けられながら深く認識されていたのではないだろうか。宮本常一は、大正から昭和にかけて行事が減少してきたことに触れながら、行事と月夜の関係について、以下のように述べている²⁾。

旧暦の行事は新暦でおこなってもどうも気分が出なかった。ということは祭りの多くは午後から夜へかけておこなわれ、日がくると月がのぼってくるというのが旧暦の行事の特色であったが、新暦では行事と月夜との関係がまるでなくなったためであろう。

このように天体というマクロな概念を含めて身の回りの環境を認識していくようなプロセスを、現代の子どもたちは経験しているのであるか。おそらく家庭生活や地域生活の中よりも、むしろ保育所・幼稚園の中での経験が貴重な機会となっていると推測できる。

3. 保育実践の現状と課題

前述の通り幼児教育においては、生活を通

しての指導が基本となっており、一日の生活の中でどのように子どもたちが過ごし、さらには年間を通してどのように園生活を過ごすのかを計画しなければならない。そこで、幼稚園教育要領では教育課程の編成に当たっては、幼児の心身の発達や、幼稚園の実態、地域の実態を考慮して計画することが、以下のように示されている³⁾。

幼稚園は地域社会を離れては存在し得ないものである。地域には、都市、農村、山村、漁村など生活条件や環境の違いがあり、文化などにそれぞれ特色をもっている。そのため、幼稚園を取り巻く地域社会の実態を十分考慮して、教育課程を編成することが大切である。(中略)各地域には、それぞれ永年にわたって培われ、伝えられた文化や伝統がある。これらに触れる中で、幼児が、日本やその地域が長い歴史の中ではぐくんできた伝統や文化の豊かさに気付いたりすることもある。また、地域の祭りや行事に参加したりして、自分たちの住む地域に一層親しみを感じたりすることもある。このように、幼児が行事などを通して地域の文化や伝統に十分触れて、豊かな体験をすることも大切である^①。(下線は筆者)

このように地域の伝統文化に触れることは、幼児期においても重要視されている(下線①)。それでは地域の大人たちの文化と子どもたちをどのように出会わせることができるのであろうか。つまりそれは、まず教育課程の中に行事としてどのように組み入れるかということになる⁴⁾。

行事は、幼児の自然な生活の流れに変化や潤いを与えるものであり、幼児は、行事に参加し、それを楽しみ、いつもの幼稚園生活とは異なる体験をすることができる^②。

また、幼児は、行事に至るまでに様々な体験をするが、その体験が幼児の活動意欲を高めたり、幼児同士の交流を広げたり、深めたりするとともに、幼児が自分や友達が思わぬ力を発揮することに気付いたり、遊びや生活に新たな展開が生まれたりする。それゆえ行事を選択するに当たっては、長期の指導計画を念頭に置いて、幼児の生活に即して必要な体験が得られるように、また遊びや生活がさらに意欲的になるよう、行事が終わった後の幼稚園生活をも考慮することが大切である^③。また、その指導に当たっては、幼児が行事に期待感をもち、主体的に取り組んで、喜びや感動、さらには、達成感を味わうことができるように配慮する必要がある。なお、幼稚園生活に行事を過度に取り入れたり、結果やできばえに過重な期待をしたりすることは、幼児の負担になるばかりでなく、ときには幼稚園生活の楽しさが失われることにも配慮し、幼児の発達の過程や生活の流れから見て適切なものに精選することが大切である^④。また、家庭や地域社会で行われる行事があることにも留意し、地域社会や家庭との連携の下で、幼児の生活を変化と潤いのあるものとするのが大切である。(下線は筆者)

行事への参加は、幼児にとって非日常的な生活体験となる(下線②)。「ハレとケ」という生活文化に対する分析視点で言えば、「ハレ」としての非日常な生活体験を経験することになる。例えば、お正月は一年の中でも最も祝祭性の高い「ハレ」の日であり、子どもたちも羽根突きや凧揚げなどのお正月特有の遊びに興じるのである。園生活の行事としては、お正月の前後に餅つきを行う園も多い。筆者が観察した年中児は、餅つき行事で経験した餅つきの餅がねばる様子を製作物として再現していた。仕掛け絵本の原理を模倣し、

ページとページの間に白い画用紙を蛇腹状に折り、伸びたり縮んだりする餅を再現したのである。

このように子どもは、周囲の環境や大人の生活から見て学んだことを、自らの遊びとして表現することを通して、環境への認識を深めていくのである。したがって保育者は、非日常の体験と行事後の日常の園生活を上手に繋げなければならないのである（下線③）。

一方で、行事に追われ多忙感を日々感じる保育士も少なくないのが実態かもしれない

（下線④）。筆者が継続的に観察している幼稚園では、園生活に行事を上手に取り入れている。例えば、端午の節句として、鯉のぼり製作の実践を行っている。まずは子どもたち一人ひとりの個人の作品も製作するが、それだけでなくクラスで大きな鯉のぼりを製作するのである。しかし、その大きな鯉のぼりが園庭にたなびくのは、5月5日をだいぶ過ぎてからなのである。なぜなら子どもの日に間に合うように子どもたちに製作の時間を与え作らせるのではなく、子どもたちが日常生活の中で「鯉のぼりを見たよ」という経験と「自分たちもつくりたいな」という主体性を重視しているからである。

宮本常一は、地域の行事の様子とその関わりについて以下のように述べている⁵⁾。

平和で単調で、同じような日が続いていく中に、こうして晴れやかで胸をとどろかすような日とその単調な日の中にはめこまれていて、そのことのゆえにみな日々を生き生きと暮らしつづけているとよかった。しかもこのように胸をとどろかす日の行事はそのほとんどが自分たちの手で演出されたもので今日のように大きな町へ出かけて行って、そこでいろいろのものを見たり、たべたりして遊んでくるというようなものではなく、一日の祭りのために何十日というほど準備や練習を日常のいそがし

い生活のなかで続けてきたのである。

このように、大切なことは単に大人の生活へ参入していただくだけではなく、子どもたち自らが行事を主体的につくり上げていくことである。しかしながら小川が指摘するように、近代公教育システム的一端である幼児教育において、子どもたち一人ひとりの発達や生活リズムよりも、効率的かつ一斉的な指導形態として行事が計画される危険も孕んでいる⁶⁾。いわゆる行事保育と呼ばれる保育形態の園は多く、行事の扱いと年間のカリキュラム構想は、保育運営において重要な課題といえる。

4. 自然の循環に基づく保育カリキュラムの構想

これまでの検討を踏まえ、実際の保育現場においてどのようなカリキュラムを構想できるのだろうか。表1は、A幼稚園の実践を参考にしながら年間の行事について整理したものである。これら行事の多くは、先代が築いてきた伝統文化であり、自然の循環がその基底にあることを確認していきたい。

日本の年度初めは、農作業のリズムに合わせて4月にスタートする。その象徴がサクラの花であり、地域によって異なるが卒園式や入園式を連想させるものである。5月に入ると連続した休日になるが、かつてはその期間に家族総出の田植え作業を行う家も多かったであろう。幼稚園では近くの水田を借りて手作業で田植えを経験する。また、園庭では端午の節句に合わせて子どもたち製作の鯉のぼりを飾ったり、兜を製作したりする。これらは、元来、武士の間に普及していたものであり、庶民の間にも男子のたくましい成長を祝って兜を飾ったり、のぼりを立てたりしたという。6月は梅雨時期のため大きな行事はないが、紫陽花の花が咲いたり、子どもたちはカタツムリを捕獲したりして遊ぶことも多い。しかし、農家にとってはこの時期の雨量が稲

の成長を左右する重要な時期となる。

7月 は、切りだした笹を飾り付け七夕祭りを楽しんだりするが、七夕にまつわる物語に触れたり、天体に目を向ける絶好の機会である。8月 は、かつてお盆期間に民衆がお祭りを楽しんだように、夏祭りや納涼会を行うことが多い。特に年長の子どもたちは泊りがけで集団生活を行うという非日常体験を経験したりする。9月 は、農作業としては、稲刈りが始まる時期であり台風被害などを心配しながら稲穂の成長と収穫を願うことになる。

10月の稲刈りの時期も過ぎると、地域の運動会が催されることになる。11月 は、農作業も一段落し、芸術の秋と言われるように発表会が行われる。また、サツマイモを収穫し落ち葉などで焼き芋を行う機会は、自然の循環を意識させられる絶好の機会になる。12月 は、正月に向けて餅つきを行ったり、農作業後の

藁を利用して正月用の輪飾りなどの藁細工を作ったりする。

1月 は、正月に供えていた餅の鏡開きを行ったり、正月特有の羽根突きや凧揚げの遊戯に興じることも多い。2月 は、節分の行事として豆まきを行うが、鬼という異界の存在に触れることで聖と俗の文化を理解することにつながるだろう。3月 は、桃の節句であり雛人形を子どもたちで製作したりして、自分たちで雛祭りのお祝いを楽しんだりする。そして暖かい地域であればサクラの開花を待ちわびる時期となり、年長の子どもたちの卒園式が行われ、自然の循環と子どもたちの成長とともに、それらの儀式が一サイクルを終えることになる。

表1. 自然の循環と保育カリキュラム

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
行事	入園式	子どもの日		七夕祭	夏祭り 宿泊	遠足	運動会	発表会 芋掘り	餅つき	正月 鏡開き	豆まき	桃の節句 卒園式
五節句		端午		七夕		重陽				人日		上巳
雑節等		八十八夜	入梅	半夏生 土用	お盆	彼岸					節分	彼岸
二十四節気	清明 穀雨	立夏 小満	芒種 夏至	小暑 大暑	立秋 処暑	白露 秋分	寒露 霜降	立冬 小雪	大雪 冬至	小寒 大寒	立春 雨水	啓蟄 春分
自然の循環	サクラ 芽吹き	田植え	梅雨入り	梅雨明け	台風	稲刈り	稲藁	木枯らし	落ち葉 ドングリ	雪	ウメ	モモ 春一番

上記の行事以外にも、設置園の宗教に基づく行事や月毎の子どもたちの誕生を祝う行事も行われることが多い。これら行事の多くに共通することは、自然の循環に基づく農作業のリズムであり、それら多くは我が国の神道

や仏教に基づく文化に根ざしている。

例えば五節句は、前述の通り、農繁期の多忙さの中にも休息日を設けるという意味で伝承されてきた祝祭の日である。従って、現代の我々にとっては、その本来の意味を実感す

ることは難しいかもしれない。

5. 総合考察

ここまで保育カリキュラムの構想において、農作業の生活リズムがその基底にあることを述べた。しかしながら現代社会において第一次産業の大規模化によって、ほとんどの家庭において上述のことを実感することは稀であろう。だが、そうであるからこそ子どもたちが農作業の一部を体験することは、行事や伝統文化の理解への一助になるかもしれない。

そこで最後に農作業の意義について、3つの意義を述べておきたい。一つ目に、農作業のリズムは、あくまでも作物自らの成長する力と天候に左右される為、人間の力は成長のサポートでしかないという点である。このことは私たち人間も同様であり、その主体の力で成長するという教育の原則に気付かされることになる。

二つ目に、家族総出の田植え作業に見られるように、農作業においてはしばしば集団性が要求される点である。例えば芋掘りや焼き芋の実践を行うと、自然と役割分担がなされ、そこに協働性が生起する可能性が高い。

三つ目に、農作業の最も大切な要素である「お天道様」をはじめ、星や月への天体への意識を育む点である。幼児教育においては、身の回りの環境として動植物や水、土、砂などに直接触れることを通して、環境認識を深めていくことが求められるわけである。一方、身の回りの環境として最も遠い存在なのが天体であろう。当然ながら直接触れることはできないし、季節によって見え方は一様ではない。しかし私たち大人にとってもこのように未知の存在ゆえ、世界各地の先代たちによって様々な物語が生み出される余地があったのであろう。

例えば、七夕の行事は、日本と中国の信仰や習俗が融合したものであり、端午の節句のようなお祝いの行事ではない。その為、保育

実践において行事の意義を明確なねらいとすることは難しいが、裁縫や書道などの技芸の上達を願う側面があったという⁷⁾。

これまで検討してきたような視点から、幼児の環境認識を育むカリキュラムを構想する必要があるのではないだろうか。本稿は、多くの園で実践されているであろう既存の行事を、元来の成り立ちやその意義を再確認することを通して、カリキュラムを構想するための一つの試論を提示出来たのではないかと考える。

6. 今後の課題と展望

近年、森の幼稚園の実践が盛んに展開されているが、それら実践の中には森と耕作地の境界における、いわゆる里山の生活をモデルとする里山型保育の実践も見られる。そうした実践の調査分析も重要であろう。同時に都市近郊においても園庭のスペース等を有効活用しながら、里山型保育の実践を追究することも今後の課題である。

引用文献

- 1) 佐野賢治 (2011) ヒトから人へ 春風社 186 頁
- 2) 宮本常一 (1993) 民俗学の旅 講談社学術文庫 58 頁
- 3) 文部科学省編 (2008) 幼稚園教育要領解説 フレーベル館 184 頁
- 4) 同上 193-194 頁
- 5) 前掲 2) 57 頁
- 6) 小川博久 (2005) 保育者にとって「カリキュラム」を作るとはどういうことか—保育者の「時間」と幼児の「時間」の関係を問うことを通して— 幼年教育研究年報第 27 巻 39-51 頁
- 7) 池田実桜・松本学 (2005) 七夕行事と絵本に関する一考察 国際学院埼玉短期大学研究紀要 77-81 頁